

## 残念なり

### 陸軍十四年式拳銃

埼玉県 寺本近造

私は、父定次、母つる、下に六人の姉弟の三男として生まれました。

家業は百姓で、自作農と小作農と両方併せての農業でした。当時は一般民衆の生活水準は低く貧しく、我が家もご多分に洩れず貧しい生活でした。ただ家族全員が健康であったことが何より良いと思えました。また当時の村人（隣人等）は、現在と異なり人情味は豊かでした。

一例をあげれば、二、三日、家族全員不在で外出時にも鍵を掛けず、戸締まり一切なしでも盗難など、一切なく心配無用という状態でした。

そのような中で友達等と家の前に流れる霞川の清流で水遊びをし、小魚を取り、わんぱく盛りを元氣その

もので育ったものです。

小学校六年卒業後は金持ちの家の子等はさらに進学し、県立の中学校へ行きました。私は二年制の高等科に通学しながら家業を手伝いました。無事卒業後は、近隣に大富豪の大地主がいましたので、その屋敷に奉公に行き、農事作業やその他のいろいろな仕事をして重宝がられ、可愛がっていただきました。夜間は青年学校に通い、軍隊に入隊した時は、青年学校出身者はすべての点で有為だといって、教官が一生懸命自分達農村青年を指導して下さいました。

当時は何のわだかまりもなく生活していました。二十歳の徴兵検査が、人生の分岐点で青年期のひとつの目印でした。それまでは人間として生きて行く進路を見極める人生修業の時期だったと私は思いました。

いよいよ徴兵検査の日が来ました。昭和十年の秋頃でした。入間町の公会堂に、入間川・豊岡・金子・東金子の近隣四カ町村合同だったと記憶します。該当者および志願者が全員集合して行われました。その数は数百人、かなり多くの人でした。役場の兵事係が一生

懸命になって世話していました。

「全員整列！」の号令によって各町村ごとに列を作りました。正面に徴兵執行官、階級は佐官級だったと思われました。一同を見渡して「諸君は帝国臣民の大義務である壮丁に参加でき得た事を無上の光栄と喜び、各々係官の指示に従い、それぞれ受検すべし、なお結果は後刻発表す」でした。全員肅々として受検しました。検査終了、再度「整列」で前述の如く徴兵執行官の前に、一人宛順次呼び出されて、それぞれに結果を申し渡されました。私の番になり「寺本近造、甲種合格、おめでとう」と言われ、復唱するのですが、軍刀を杖に立ち上がっている陸軍佐官のような偉い人の前です。緊張のあまり声が出ませんでした。が無事終わってやれやれでした。

帰宅後、父に甲種合格だったと報告しました。父は「そうか甲種か、一度は行くのも良いだろう」と申ししていました。母は傍らで肩を落として「近造も兵隊に取られたか」と淋しそうに呟いていました。母親としては、もっともなことでしょう。

その年の暮れ近いある日、役場の兵事係から、「寺本近造さん、入隊日は来年三月一日に満州・勃利の独立歩兵守備隊へ行く事になりました」と連絡を受けました。その後、そっと母の顔を見ました。覚悟していたのか平然として、いつもの顔でした。父は「なにも満州へ行かんでも、関東地方にたくさん連隊があるのになあ」と辛そうでした。自分はそれまでにすべての仕事を片付けて置いて、心おきなく入営すべく内外共に多忙でした。

昭和十一年二月二十五日、陸軍入隊のため「壮行会」を盛大に開催して頂きました。翌日二月二十六日、東京駅に集合です。兵事係がそれぞれ自分達の関係者を引率して、初年兵受領の軍人に引き渡すのです。満州の現隊から来た軍人は名簿と人員を点呼したうえで、早急に「全員乗車！」と命令を下し、あたふたと車内に入って行きました。この時、なにか不可解なものを感じました。見送りの人も、そこそこに別れを告げて引き揚げました。翌朝、即ち二月二十七日。初年兵受領の下士官は陸軍軍曹でしたが、「昨日

は東京で大変な事件があった」と聞かせて下さった。世に言う二・二六事件だったので。「戒厳令」が発令中だったので。

翌日、宇品港にて乗船、出帆しました。船名は忘れましたが、鉄鉱材輸送の貨物船でした。なんだかさび臭い匂いが鼻を突きました。玄界灘も波静かでした。一昼夜して三月一日、大連港に入り、船中泊して翌二日に大連に上陸しました。すぐ列車に乗って一路北進でした。三月五日夜、勃利の原隊へ到着しました。列車が三日間ばく進してようやく目的地とはさすが満州だ、広漠なる大平原だと思えました。

時は三月で日本だったらず少し春めいて来る頃ですが、ここ満州勃利は、まだまだ厳冬が続ぎ、大地は鋼鉄のごとく凍ってコチコチでした。肌着から軍服、軍靴、軍帽に至るまで全部取り替えました。「明朝、入隊式を行う、今夜はゆっくり眠れ」と達しがありました。私達同年兵は九十二人で、二年兵（先輩）は四十人程いました。兵舎は民家のような建物でした。防寒

設備は十分行き届いていました。壁は厚い泥壁で四〇センチ位で、窓は小さく二重窓でした。暖房のために壁「ペチカ」や床用に「オンドル」といって窯の煙火の道を作って、室内全体を暖め、また場所によってはストーブを燃焼していました。

独立歩兵第二十四大隊第一中隊が我が部隊で、勃利に駐屯しているのは第一中隊です。翌朝、起床ラッパに起されて営庭に整列して、中隊長の訓示を受けての入隊式でした。「各中隊は北滿の要衝、要所に分駐し治安維持に務めています。我が中隊は一三〇人全員一丸となって北滿鎮護に心血をそそぐのだ」でした。

軍馬十三頭が中隊にいました。この当番は大変でした。初年兵教育も、聞いていたほど厳しいものではなく、青年学校の教育を受けていたお陰で、他の同期生に比べると自分は楽しいくらいの初年兵生活でした。入隊一週間目に匪賊が現われて「すわ一大事だ」と討伐に出動です。鉄砲の撃ち方もまだ不十分な自分達初年兵ですが、そこは度胸一番で体当たりで行けまし

た。

春になり夏が来て、少し大陸ぼけになったかなと思っていたのですが、盛んに匪賊の出没でその都度出勤して行くのです。内務班の整備、整理・整頓、武器の手入れ、そして軍馬には一番気を使いました。駐屯地にいる時は良いけれど、少し遠出の時は軍馬を使用して諸物資、時には重火器・彈藥等の運搬です。暇な時は学科の勉強も大切な行事でした。「歩兵操典」「各科教範」「作戰要務令」「刑法懲罰令」「各部勤務守則」、そのうえにラッパ音までです。

九月初めに第一期の検閲があり、その時に同年兵の約半数が選抜一等兵になります。自分は一選抜でした。分遣隊長が「寺川、貴様は良く頑張るから、この調子で行くと選抜上等兵だ」と励ましてくれました。が、その次の討伐戦闘の帰路、兵営を目前にした地点で小休止をし、全員軍装備して営門に入るため整列した時、確かではないが分哨長の命令で自分が陸軍十四年式拳銃を所持するようになったのですが、それをどこかへ置き忘れたとの事でした。後刻、他隊の兵が取

得して届け出がありました。

陸軍の兵器には、銃・帶剣等は、全部一連番号が刻印され、全兵器の履歴書が兵器所持部隊に保管されています。そのため、この拳銃は自分の分遣隊の物だとすぐ判明しました。即「寺川近造、中隊長室へ出頭せよ」でした。中隊長に当時の経緯等を報告しました。

本来なら分遣隊長が始末書を提出し、そのうえ、罰則に照合して処置する事だと思いましたが、初年兵の自分に罪を背負わせて万事終わりでした。おかげで進級停止・精勤賞没収となり、この一件で万年一等兵という次第です。誠にあほらしい、馬鹿げた話です。

この話は現在まで他言禁止でしたが、八十五歳までも長生きしたからお話しするのです。農村出身で真面目一途の若者に罪を着せた上官が憎い、それも前日、刑法懲罰令を勉強した直後でした。

昭和十二年六月、住み慣れた（一年三カ月）勃利の兵営に別れを告げて、北方四〇〇キロの佳木斯に移動命令が出ました。第一中隊全員無事に佳木斯に到着、

兵舎は駅の南東にありました。市街地も近く遊ぶには都合良い所でした。自分は落伍兵の二年兵というだけで、毎日が気楽に暮せて楽しかったものです。街中には満人街に泥棒市場があり、また軍人の立入禁止の所もありました。街の北側を松花江が流れ、満々たる濁流が音を立てて流れていました。西は（上流）富錦・同江を経て黒龍江と合流しています。港の市場には一メートルもあるコイヤナマズやドジョウがいました。少し泥臭いが天ぶらにしたら結構食膳に出せたものです。

匪賊警戒や鉄道警備には日夜別なく出勤させられました。独立歩兵は他部隊と異なり移動・転出が安易なのか、いつお呼びがあるか不明でした。

松花江は冬に氷が張る時の音響は見事なものです。最初薄氷が張り、これが破れて二度目が張り、また三度目と氷点下に厚い氷ができて、先に凍った表面の氷を破って突き上げるのです。春にはこの反対の現象が現われます。冬季の初氷から順次厚氷になって行くのですが、氷上を通過できるのは原住民が渡ってからで

ないと、日本人には渡れません。一番に人が渡り、馬が渡り、馬車（マーチヨ）が渡り、したら兵隊も渡ります。自動車は次の寒波まで待ちます。

昭和十三年の冬、寒波が襲来した後に、方面軍命令による測量隊が到着しました。ロシアと満州の国境測量です。現存の関東軍所持の地図との誤差調査です。冬季は川も沼も湿地もなしで、どこでも凍って通行可能で十分調査ができます。が、自分の方ができ得るといふ事は敵もできることです。用心の上にも用心して行わぬと大変な事になります。原野も大地も大河も皆白一色です。地図上に境界があっても大地や大河にはそのような印はなく、万一国境侵犯者として攻撃されたり、死傷したり、場合によっては抑留されたら大変です。

ノモンハン事件は翌年の春五月で、不可侵条約は昭和十六年です。このような時代ですから、特別に重大な注意と決意で事に臨むべしと私は思いました。約四十余日、雪原を歩き回りました。一本の木もない皿の

ような山、凹地に行くと股まで雪がくるような吹き溜り、そこを通過すると吹きさらしです。体感温度は風速何メートルで何度という厳しさです。それでもまだ行動中は気も紛れますが、夜間眠る時は大変でした。

住人不在の民家があれば無断借用、有人時はいくらかの食料を渡して、土間の片隅でも借りて眠りました。

無人の原野が当然ですから、雪原に穴を掘り、携帯天幕等で雪囲いを作り、携行燃料で雪をとかしてお湯を作らぬと飲食が一切できないのです。太陽に恵まれた古里の有難さを十分体験しました。

もちろん、移動しますが、その時は軍馬十三頭で馬糞を引かせ、すべての資材・物資・食料まで運びました。兵員も便乗しました。急坂は、降りて後押しでした。北満の厳寒は文字通り風雪に身をさらし、寒さは骨の髄までしみ込みました。この黒龍江測量警備隊のわずか四十余日が、自分対大自然の最大の戦いであったように思えます。寒さと飢え、そして疲労、敵しかったものです。今も夢に見ます。

昭和十三年春、古兵は全員満期除隊しました。自分達が古顔で一番兵隊頭です。まして万年一等兵という肩書がついているので恐いものなしで、別段苦勞もなく、北満鎮護の役目を果たしていました。内心では来年になって現役満期の時に、何を行うかを考えていました。内地に帰っても労働賃金は安いと手紙で知らされていました。日支事変（日中戦争）が拡大するようなら、満州の方で働いたら、これも一つの人生の道だと思い、休日にも外出しても働く事や仕事の事を考えていました。

その頃、大阪の第四師団が佳木斯駐屯で来ました。我等独歩は厳しい中で働いて来たのに、正規師団は甲編成の兵舎ですべてが豪華でした。この大阪師団も少しの間で、南方マレーの方へ転進してゆきました。その後には姫路の第十師団が駐屯しました。

昭和十四年四月一日付にて管門上等兵となり、現地の関東軍に軍属として勤務する事が決定してしまいました。同年兵の満期除隊の乗車列車を見送り、「ポッターンコー、ポッターンコー」と轟音を響かせて走り去るの

を一人しょんぼり見て、「俺も男だ、今にきつと一旗揚げてやる」との思いでした。勤務は、佳木斯駅の南側に立ち並ぶ大きな倉庫群で、関東軍倉庫ですが、糧秣倉庫・被服倉庫・兵器倉庫等々が整然と収納してありました。当面の警備は第四師団司令部直轄でした。

そのような状態の中で現地人を使つての作業でした。彼等の中に融合して一番初めは言語の勉強でした。兵隊が使用する満州言葉とは少し差があります。

そして彼等を十分に信頼し、また彼等が自分達に尊敬のまなざしで接してくれて、初めて業務が円滑に進むのです。君（ニデ）、自分（オデ）、親方（ジャングイ）、人力車（ヤンチョ）、馬車（マーチョ）、了解（ミンバイ）等々、現在は忘れましたが、それから二年八カ月面白く楽しく働きました。もちろん軍属以外の仕事でも（闇働き）かなり大金を手に入れました。

昭和十六年十二月、米国と戦争になり、自分も家庭の事が気掛りで一度帰国しようと思ひ、十二月二十六日に埼玉へ戻りました。

その頃、父親が体調が悪く、お医者さんは「この春まで……」と言っていました。私の送った金で田畑も買い増し、かなり生活も良くなり、兄妹も喜んでいました。昭和十七年三月、頑丈者の父も他界しました。

再度の渡満を断念して、立川飛行機製作所で機械工として働くことになりました。翌年、知人に勧められ結婚して一家を構えました。友人達が、次から次へと召集令状で呼び出されて戦線に征きました。会社の方では腕の良い機械工が不足して生産に支障を来すと言つて、私は特別軍属として飛行機製作に必要人物であるから召集免除の手続きが取つてであると知らされ、一生懸命に働きました。

昭和二十年二月十日に第一回空襲があつたと記憶しています。それから終戦の八月の初めまで、八回、九回、十回と強烈なる空襲がありました。当初は高度からの焼夷弾爆撃だったので、終戦近くなつた頃は、飛行機の搭乗員の顔が見えるような超低空飛行で機銃掃射をして飛び去るようでした。

かくして八月十五日終戦の日を迎えました。私の青

春は何だったのだ。今、じーっと振り返り見る時、戦争ほど馬鹿なことはない。最高に尊い人命を殺戮まうりくし大自然を破壊する。八十五歳の老兵は声を大にして叫びたい。「二度と戦争を行うな」と。合掌。

## 私の従軍記

岐阜県 森 金次郎

私は、大正十一（一九二二）年十二月十四日、岐阜県武儀郡武儀町で生まれました。昭和十七年徴兵検査を受け、見事甲種合格。歩兵で中部第四部隊へ現役兵として入営しました（第四部隊は岐阜の元の第六十八連隊）。入営は昭和十八（一九四三）年三月十日の陸軍記念日でした。

その当時の我が家族構成は

父母共に健在 農業及び林業

農地約一町歩、山林約四十七町歩

兄 戦死 昭和十八年一月 ニューギニヤ

本人 健在 蚕業技手（岐阜県）

妹四人弟一人 健在 皆若く幼い

という状態で、私が兵役に就くことは家庭にとって打撃となりますが、当時の国情からすべてをなげうって勇躍入営しました。

入営して約一カ月後、満州第六三四部隊（第二十五師団の歩兵第七十連隊（第四九〇五部隊））へ転属となり、満州国東安省密山県へ出征でした。この土地は、ソ連領の沿海州に近い酷寒の地で冬季はマイナス三〇度でした。この寒さに慣れない初年兵は大変困りました。特に皮膚の弱い者は耳たぶがふくれてきたり、皮膚が荒れて炎症を起こしたりで大変でした。日本内地の寒さとは大違いでした。

東方に興凱湖という広大な湖があり、その近くの花山という地点に駐留し、陣地構築や敵情監視を兼ねて警備をしました。入浴設備がないため、虱がわいて虱退治に苦労した思いもあります。私共の駐屯していた時期、地域では戦闘、作戦、討伐等はありませんでしたが、気候、風土、疫病には苦しみました。寒さ防